

「言葉は同じ、平和的解決」でも、

日本とペルーでは

意味が違うのがよくわかった。でも終わったようでいて、何も終わって

いない気がする」

沖縄在住の日系という立場からは、否応なしに様々な社会問題と直面せざるを得ない。

「触れるのか、避けるのか。どちらも間違っていないけれど、ぼくは自分の問題として引き受けています」

声高にメッセージをぶつけたのではない。「歌うことがだれかの励ましになると信じている。明るい歌もつらい歌もだから必要なんだ」。あくまで前向きなのがディアマンテス流である。

山内浩司
BOOK

フランス版村上龍

映画「ディーバ」で知られる、というより、最近は女優ロマースのお父さんといった

方が通りのいい俳優リシャール・ボーランジェ。

フランスで十年前に出版され、百三十万部のベストセラーになつたエッセイ『ブルース』が、村上龍の訳で、幻冬舎文庫から発売された。

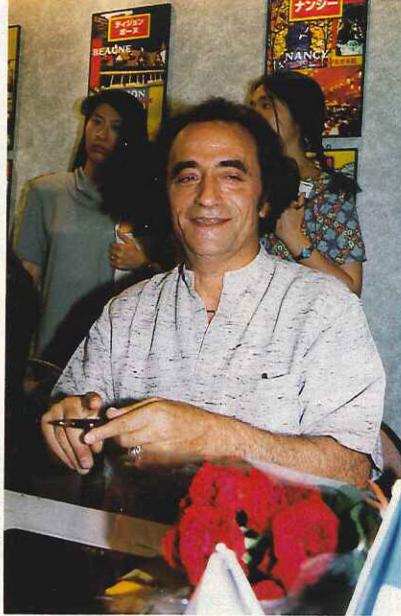
「人生よ、僕はおまえのなかにもっと入り込みたい。無邪気に、まだ明るいうちに、僕は燃え上がりたい」

詩を読みながら、アルコ

ルとドラッグ、女たちとの日常が、生々しくつづられていく。フランスでは、ストリートキッズのような若い人たちを中心には読まれた。

それに加えて、「映画は何百万人もの支援が必要だが、本は五万人が買ってくれれば十分。より自由に表現できる」というものの、出版社と契約したのは三十年前。契約金の三万円は飲んでしまい、書き上がるまでに二十年もかかった。

仲宇佐ゆり



俳優のほかに脚本家、映画監督、歌手ときまとまな顔を持つボーランジェだが、「書くことは自分にとって一番大切。俳優は他人の言葉しか語らない。それだけじや悲しいから」

photo 佐藤 麗 (上) 山内浩司 (中) 仲宇佐ゆり (下)